

# ICTと英語の授業(3)

## — 学習の基礎・基本に立ち返る



杉本 薫 Sugimoto Kaoru (東京都立両国高等学校附属中学校)

### 1. 学習の基礎・基本とは

3回にわたる授業レポート「ICTと英語の授業」の最終回は、「学習の基礎・基本に立ち返る」というタイトルを付けた。ここで注目するのは「デジタル教科書」である。しかし、すでにこのTEN23号で、このデジタル教科書の具体的な使い方に触れた記事も紹介されているので、ここではもう一步原点立ち返った視点から見直していこうと思う。

まず「学習の基礎・基本」という言葉についてだが、様々な視点から使われる言葉なので、ここでは次のように定義しておきたい。

- ① 毎日学習すること
- ② ひとりで学習すること
- ③ 自分で評価できること

デジタル教科書を切り口にして、この3点を考えると、英語学習としてまず取り上げなければならないのは、「音読練習」である。

### 2. 教科書の音読

およそ今日の授業で使った教科書のあるページが音読できなければ、家庭では生徒はひとりで復習することはできない。ひとりで声に出して読めなければ家庭での練習そのものが成り立たない。そもそも声に出して読めない生徒は、英語に自信を持つことは、できないだろう。読めないことがはずかしいから、授業で消極的になるし、そうなれば当然発言や発表からも遠ざかり、決定的な悪循環に陥る。そう考えると、授業中に音読できるようにしておくことは非常に重要である。

音読できるようになるための学習はおよそ次のステップを踏んでいる。学習者のためのスモール・ステップを準備するという観点から、授業の展開とこれらのステップの高さという点から見直してみよう。

#### Step 1: 英語の音に慣れる

最初に、日頃の授業の中で、「英語で指示されたり、簡単な説明を受けたりする場面」を継続的に用意し、英語の音声によるコミュニケーションを「当たり前」にしておく必要がある。英語の音声のソースはほとんど教師の発する英語になるだろう。使い慣れたリスニングCDやデジタル教科書も重要である。この「当たり前」と感じるのが、スモール・ステップの観点から見ても最も重要な要素になる。

#### Step 2: 音声を聞きながらある程度の内容がわかる

ここでは、Oral Introduction (with Interaction) として教師が提示する英語とその内容が全てである。Interactionとともに行うことによって、ステップの高さを調節できる。話題が難しい場合に備えて、日頃から日常生活とうまく結びつけることや、生徒が耳にしたことのある外来語(カタカナ英語)を利用するなどして語彙を増やしておくことになる。

ここは、教師の英語がものを言う場面だが、デジタル教科書のビデオやピクチャーカードなどの画像をうまく使った視覚効果を利用することも効果的だ。特に、何回でも同じ場面を見せることができるという再現性に優れている点は、ぜひ利用したい。生徒に教科書の内容を英語で再現させる学習は、この教師が行うOral Introductionがそのまま生徒の発表のモデルになる。同じピクチャーカードを使いながらなら、さらに再現しやすいはずである。

#### Step 3: 音声を聞きながら、ある程度の視覚(文字)情報がわかる

まず、文字を見ながらリスニングさせる。リスニングとしては、教科書を開く前に行うやり方も想定される。しかし、Oral Introductionをしっかりと行ってしまうと、内容を聞き取って理解する段階というよりも、Oral Introductionの内容を再確認

するために文字情報に接近するステップと考えられる。実際にはリスニングによる理解が中心のページと、Oral Introductionが中心のページを話題によって使い分けることが望ましい。

目標である「教科書を声に出して読めるようになるための音読指導」としては、「フラッシュカード」に注目したい。

「フラッシュカード」の効用については第1回目で述べた。耳で聞いた音声（発音）と目で見た画像（文字）を結びつけて練習することにより、文字情報の音声化を生徒が自分で行うことができるようにする非常に重要なステップである。英語の授業では欠かすことができない。ここでのポイントは2つ。1つ目は、実際にフラッシュさせて、文字情報を一瞬の画像から判断させる練習が必要であること。紙のカードで行うには、教師の方にかかなりの練習が必要である。2つ目は、生徒の学習状況や話題に合わせて必要な語彙を選ぶことである。デジタル教科書のフラッシュカードはこの点では、新出語句に限られているので、やや制限がある。ほとんどの場合、教科書を読み始めるにはこれで充分ではあるが、もう少し復習の語も一緒に練習したいときなどにはやや使いにくいこともある（連載の第1回目（TEN22号）に、無料で使えるソフトを紹介）。

**Step 4：音声を真似して読みながら、内容と視覚（文字）情報が一致する**

モデルについての反復練習を行う。1文ずつ、必要に応じて、短いフレーズを繰り返す。デジタル教科書でもリスニングCDでも使いこなすことによって対応できるが、やはり、教師の範読に付いてこさせることが効果的である。デジタル教科書では音声再生されている部分が明示されるのでわかりやすい。また、アンダーラインなどの機能を使えばさらに強調点をはっきり指導することもできる。

**Step 5：内容を理解しながら、視覚（文字）情報を音声化する（音読する）ことによって、相手に内容を伝えることができる**

音読練習（Buzz Reading / Choral Reading）を行う。教科書のページを見ながら、モデル音声なしで音読する。必要な箇所はもう一度モデル音声を聞いてさらに練習する。この練習を教室で繰り返して

おくことで、生徒は自分ひとりでも音読練習ができるようになる。

また、ちょっとした工夫だが、声を出しやすくしたり、自分の音声に集中させたりするために、BGM（バックミュージック）を流すことも有効だ。これはまた、時間を意識して練習させる効果もある。

**Step 6：内容を伝えることを意識しながら、英語らしい音声を強く意識した読み方ができる**

音読練習（Group Reading / Pair Reading / Individual Reading）の段階になると、様々な形でさらに生徒に音読させることになる。緊張感を持って読むためには、聞き手が必要になる。教師はもちろん可能な限りモニターして、アドバイスすることが必要である。最終的には、教室で他の生徒が聴いている中で、ひとりで読ませることになる。そこまでのステップとしては、「となりとのペア」「前後とのペア」「数名程度の小グループ」などの段階を経ていくことで、可能になる。ここでは聞き手の指導も大切で、場合によっては教師よりも有効なアドバイスを交換できることもある。生徒に自信をつけさせることが目標だ。このステップまで到達していれば、ひとりで復習することはそう難しくはない。

前述した、家庭学習としてひとりで練習する姿を思い浮かべると、ここまでのふだんの授業時間の中での到達目標になるはずである。

**Step 7：ある程度覚えた上で、自己表現として再生できる**

暗唱（Recitation） / 教科書の内容を自分の英語で発表する Re-Telling（Oral Presentation） / Speech / Skit / Dramaなどは、音読の練習としっかりリンクさせておかなければならない活動である。単に音読させておけばいつかはできるというものでもない。早い段階で目標として意識させておくが必要である。

このうちRecitationとRe-Tellingは授業のレッスンとリンクさせて練習させることが可能なので、比較的ハードルは低い。特に、教科書の内容を英語で再現させる Re-Telling は生徒が自分でチャレンジするレベルを選べるので、ふだんの授業の中に「当たり前」学習として定着させることが望ましい。いくつかのキーワードや画像などを調節すれば、1

つ1つのハードルはそれほど高くないし、人前でやる活動なので達成感も高い。このようなシンプルな発表を繰り返すことは、発表者と同時に聴衆側の生徒たちへの指導も繰り返し行うことができる。両者が共に学び共に成長していくことを考えると、これも重要な要素だろう。私の学校では、教科書の音読テスト、リスニングCDの音声を追いかけてながら発話していくシャドーイングとともに、全学年でほとんど毎レッスン終了時に行っている。

「シャドーイング」は画面を見ないで音声の後について暗唱していく練習で、その1つのステップとして、デジタル教科書の「シャドーイング」機能は積極的に使いたい。



(三省堂「NEW CROWN デジタルテキスト1」より)

### Step 8: 大切にしたい表現, 重要な表現や言い回しが, 自然に口をついて出てくるようになる

日常生活の中で英語を使う場面が想定される。難しい、珍しい表現ばかりを考えると遠くの話のように感じるが、ふだん当たり前のように行っている英語のあいさつを考えれば、この最終目標もそれほど遠くの話ではなくなる。ここでも課題は2つ。1つ目は、授業の中でそのような発話をさせる場面を用意できるかということ。2つ目は、Step 1~7をどのくらいの頻度で繰り返すことができるか、言い換えれば、「当たり前」にできるかということである。

生徒の家庭学習に立ち戻ると、程度の差こそあれ、どの段階でも適切な音声が必要である。前述のように授業で蓄積することで補うことは可能だが、手元にあることが理想である。そうになると、デジタル教科書が全ての生徒の手元にあるという環境が理想だ。音声だけでなく、リスニングCDを利用することである程度可能であるが、デジタル教科書でこの環

境が実現できれば鬼に金棒であることは間違いない。

### 3. これからのデジタル教科書に期待すること

最終回なので、これまでに触れられなかった点も含めてデジタル教科書の今後の展開について簡単に述べておきたい。

- ① これは少し触れてきたことだが、生徒ひとりひとりが実際に手にして使えるようになることが理想だ。これが実現すると、教室での学習体験が自分の学習の直接のモデルとして機能してくる。デジタル「教科書」である以上、生徒ひとりひとりが携帯する教科書であることも目指すべきだろう。
- ② デジタル教科書をデジタル黒板として考えると、デジタル教科書は教材提示と同時に、書き込みやまとめなど、さらにインタラクティブな使いこなしができるだろう。
- ③ デジタル機能ならばさらに生徒が記録することもできるはずである。これは言わば「デジタルノート」ということになるだろう。考えてみればパソコンでも携帯電話でも、これに近いことはすでに十分に実現している。
- ④ もしひとりひとりがタブレットのような機器を使って学ぶことができるようになると、デジタル黒板とデジタル教科書、そして、デジタルノートが一体化することもそう難しくはないはずである。

### 4. ICT活用を考えたときの軸足は

英語の授業にとっては、ICTを活用する・しないにかかわらず、重要なことは全く同じである。ただし、使った方が「興味関心を高めて長続きし」、「音声を重視した学習効果を高めて教室での学びに直接生かすことがしやすい」、そして「自分で工夫しながら学ぶことで発展性を高める」という意味においては、はるかに効果的である。「学習者が自ら主体的に学ぶ」ということを最終目標に置くとすれば、こういった取り組みは、その最初のステップから学習者の姿勢を支えて、背中を押していくことになるといえるだろう。

このように考えると、実は英語教育だけに限った話ではなくなるのも事実である。